

「講義と演習の“有機的な”統合を目指して」

教育臨床 江上園子

＜授業の目的：シラバスより＞

子どもの発達の様相を大まかにつかむことは、子ども理解や子どもの教育において欠かせない。そのため本授業では、乳児期から青年期までの子どもの認知的な発達、社会性の発達について概観し、子どもの発達に影響を与える要因としておもに子どもを取り巻く人間関係についても近年の研究知見を紹介していく。これらを通して自分の研究生活や修了後の教育活動にも活かせるようになることを本授業の目的としている。

＜授業の到達目標：シラバスより＞

- ・乳児期から青年期までの子どもの発達の様子を説明できる。
- ・子どもの発達に影響を与える要因として、家族や学校での人間関係を理解できる。

＜授業の概要：一部はシラバスより＞

子どもの発達の様相を大まかにつかむことは、子ども理解や子どもの教育において欠かせない。そのため本授業では、はじめに乳児期から青年期までの子どもの認知的な発達、社会性の発達について概観する。さらに子どもの発達に影響を与える要因として、家族関係や学校での人間関係についても最新のデータを呈示して知識を得ることで、教師の影響力の大きさや子どものかかわり方について議論する。最後に、受講生がもっとも興味を持ったテーマについての論文を発表することで、本授業で得た発達心理学の知識や子ども理解が自分の研究生活や修了後の教育活動にも活かせるような授業を目指した。

本授業は、全15回の授業であった。受講者は10名である（うち、学校臨床が2名・臨床心理が8名であり、すべて1回生である）。前半はおもに授業者が作成したプリントを用いつつ、パワーポイントやビデオ教材による講義形式で行

った。後半の授業では、院生が発達心理学の分野において興味関心を抱く論文を選定し、それをレポートするという演習を行った。以上の二部構成で授業を設定して行った。

本授業の初回に、発達心理学に対する知識や理解とこれまでの勉強について院生全員に質問を行った。その結果、「学部時代に学んだ経験がある」院生と「ほとんど学べていない」院生が約半数ずつであった。したがって、第一回目に生涯発達の観点から人間の発達について概論的な講義を行った。その後、授業のメインテーマである「発達に影響を与える環境」として、養育者（父親および母親）、教師、きょうだい、仲間という存在との関係性を取り上げ講義した。後半は、前半で学んだ発達の知識をもとに、各自が興味関心を持った論文を選定し、それを自分なりにまとめて発表する場を設けた。その際には他の院生から質問や意見、感想などを自由に述べさせ、議論の時間を設けた。

＜授業評価アンケートの結果について＞

試験日の際、無記名式で授業評価アンケートを行った。質問事項とそれらについての回答内容は下記の通りである。

1. 「この授業を受講して良かったと思えましたか。5件法（まったく思わない～とても思う）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、4（まあそう思う）：1名、5（とても思う）：9名という結果であった。理由としては、4：「自分の研究とは違う分野で楽しかった。後半のディスカッションが盛り上がるとういふなあと思います」、5：「発達の分野について、現在の研究の動向まで分かりやすく理解することができた」「子どもの発達に影響する要因について、従来の母親からのみの視点ではなく、父

親・きょうだいの要因も詳しく知ることができたから」・「子どもの発達についての復習と言葉のみの理解だったところが意味まで理解でき、論文の発表では、皆の興味あるところがよくわかったことと、自分の興味があまりなかったことに触れられた」などであった。

2.「この授業の内容をどの程度理解できましたか。5件法（まったくできなかつた～かなりできた）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、3（どちらともいえない）：1名、4（まあできた）：8名、5（かなりできた）：1名という結果であった。理由としては、3：「授業後の自分の振り返りや復習不足などが原因だと思われるが理解が十分とは言えない」・4：「レジュメもわかりやすく、單元ごとの話題も明確で理解しやすかつた」・「発表の回ではディスカッションを通して深めることができた」・5：「自分の経験や考えを反映させながら受けたり動画で実感したりわかりやすかつた」等であった。

3.「この授業を受けて、意味があつた（役に立つた）点は何の程度ありますか。5件法（まったくなかつた～かなりあつた）で答え、どういふ点に意味があつたか（役に立つたか）、具体的に書いて下さい。」

この質問では、3：1名、4（まああつた）：3名、5（かなりあつた）：6名という結果であった。具体例としては3：「わからない」・4：「発達と関連のある研究をしようと思つているのでその役に立つた」・「論文の発表で自分が質問されたり他の人の質問をきいて着眼点がいろんな方向にあることを改めて知り、論文を多角的に読むことの大切さ」・5：「母子の発達に限らずきょうだいや外部といったあまり扱われにくい部分に関しても勉強できたこと」・「様々な研究に触れその多様性を感じられたこと」などが挙げられていた。

4.「この授業で改善すべきところはどの程度ありますか。5件法（ほとんどない～かなりある）で答え、どこを改善した方がいいか、書いて下さい。」

この質問では、1（ほとんどない）：5名、2（それほどない）：2名、3（どちらともいえない）：1名、4（少しある）：2名という結果であった。改善点としては2：「話し合いの中で、自分の考えを言うことができなかったことが残念であり、反省もしている。」・4：「発表の回数あるいは1人の持ち時間を増やしても良いと思うまた、発表者が話し合いたいポイントを用意する」・「学生の文献発表の際、事前に資料がわたっていると意見交換等に深まりが出るかと思つました。」という意見があつた。

<地域社会を核とした教育と研究のつながり>

本授業では理論や論文を紹介する際に愛媛県内の幼児・児童生徒や保護者ならびに学校教員の事例などを数多く提示した。それによって、客観的なデータや現実味に乏しい理論や研究を身近なものとして理解させることができたことが本授業の教育的意義であると思つる。院の修了後、社会に出てのち本授業で得た「実感を伴う」この知見が活かされることを期待している。

<今後の課題>

本授業は「発達心理学の知識を得る」・「発達心理学の論文を読む」という、二つの活動を含み、その二つの有機的な統合を目指した。この授業スタイルはおおむね好評価であつたことから、来年度も続けていきたい。

前半の授業者による講義についてはこのアンケート上ではとくに改善を要する点はなかつたが、後半の文献発表の回の部分では改善点が大いにある。授業者の想定が甘かつたこととして、その場で論文の発表を聴いてすぐにコメントできる院生が少数であつたことが挙げられる。大学院の授業とはいえ、約半数が発達心理学の初学者であることを考えると、院生からの改善点の提案にもあつた通り、事前に受講者全員に対して発表担当の院生に論文を配布させておくか、インターネット上で閲覧する方法を構築するか、次年度に向けて取り組んでいきたい。また、発表者に議論のポイントを考えさせておくというのも参考にしたい。